障害のある学生のための支援者育成と課題
—山口大学におけるノートテイカー育成の事例から—

岡　田　菜穂子
小　川　　勤
田　中　亜矢巳
金　子　　博

要旨

近年，我が国の高等教育機関では，障害のある学生への支援の充実が急務とされている。支援の実施運営上，課題が多いとされるものの一つに人的支援がある。支援者をどのように確保し育成するのかについて，本稿では，山口大学学生特別支援室でのノートテイカー育成の取組を例に，その仕組みと課題を整理したい。

大学での支援ニーズは，直前まで把握できないことも多い。支援の多寡が明確でない状況下で，いかに支援技術を高め，支援者のモチベーションを保ちつつ人材をプールできるかが重要となる。本学では支援と教育を連動させ，大学間連携を活用するなどして，これら課題に取り組んでいる。

キーワード

高等教育，合理的配慮，障害学生修学支援，ノートテイク

1 はじめに

我が国では，平成 28 年 4 月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行され，国立大学においては障害を理由とする差別の禁止と合理的配慮の提供が義務付けられている。多様な学生が学ぶ教育環境の整備のためにも，現実的な修学支援のためにも，障害のある学生（以下，障害学生）への対応は急務である。

大学における障害学生への支援の中でも，人的支援は支援者の確保，育成，配置を限られた時間と予算の中で行わなければならない点で課題が多く，苦慮している大学も多い。特に大学では，支援ニーズが明らかになってから支援を実施するまでの期間が短いことが多く，また支援ニーズも様々であることから，支援の多寡が明確でない中で，いかに必要な支援者を確保し，的確に配置し，効果的な支援につなげられるかがポイントとなる。

人的支援として挙げられるものに，点訳・墨訳，ガイドヘルプ，手話通訳，ノートテイク，パソコンテイク等がある。日本学生支援機構が実施する「障害のある学生の修学支援に関する実際調査」によると，中でもノートテイクは多くの高等教育機関数で実施されている支援方法である。

そこで本稿では，山口大学におけるノートテイカー育成を例に，障害学生のための支援者育成方法を紹介するとともに，支援者育成上の課題を整理したい。

2 ノートテイクの実施要領

ノートテイクとは，手書きやパソコン入

力により，音声を要約して筆記通訳する情報保障の方法である。授業中の支援として実施している大学は多く，平成 28 年 5 月時点で 188 大学にて実施されている（日本学生支援機構 2017）。

ノートテイクは，支援ニーズに応じて，手書きかパソコンかの手段，テイクにかける人数，テイク方法を調整して実施すると効果的である。まず，これらノートテイクの実施要領について見ていきたい。

2.1 ノートテイクの手段

ノートテイクの手段には，手書きとパソコン入力がある。授業形式，支援ニーズ，テイカーのスキル等を加味して，手書きかパソコンかを決定する。

例えば，口頭での情報量が多い講義にタイピングが得意なテイカーをマッチングできれば，パソコンでのテイクが効果的である。また，数式や外国語，記号が多い授業では，手書きテイクが現実的な手段として挙がってくる。

ノートテイカーには，手書きとパソコンいずれのスキルも十分に備わっていることが理想であるが，テイカーによっては，タイピング速度が十分でなかったり，手書きよりパソコン入力が得意な場合がある。学生特別支援室では，基本的にはテイカーが自分で取り組みやすい手段からトレーニングを初め，次に苦手なスキルを克服するために練習を積むよう指示している。

2.2 ノートテイカーの人数

ノートテイクを行う人数は，テイクが必要とされる場面により異なるが，大学での授業であれば 1 名～2 名で行う場合が多い。次に述べるノートテイク方法によって，連携テイクの場合は複数名で，ポイントテイクや板書の代筆の場合は単独で行うというように人数を決定する。

長時間にわたるノートテイクを実施する場合には，テイカーの疲労度や負担を考慮して交代制にしたり，情報量の担保が必要であったり正確性を期す場合には 4 名～8 名のグループを組んで実施したりする。

2.3 ノートテイクの方法

ノートテイクは，音声情報を文字化する支援方法である。聞こえにくい学生に対する要約筆記としては，単独でのテイクと，複数名が連携して一つの内容をテイクする連携ノートテイク（連携テイク）がある。

聞こえの程度によっては，発言内容を全て要約筆記するのではなく，板書の代筆に加えて重要な内容を中心にメモするポイントテイクが有効である。板書の代筆は，聞こえにくい学生が発話者の口元に集中でき，授業内容を理解しやすくなるという効果がある。さらに板書の代筆は，聞こえにくい場合だけでなく，見えにくかったり，手が不自由でノートをとることが難しい場合にも有効である。

図 1 パソコン連携テイクに使う機器
（山口大学学生特別支援室での活用例）

3 山口大学における支援者の育成

山口大学では，在学する障害学生のため

の学内修学支援の拠点として学生特別支援室が設置さている。学生特別支援室では，日々の相談対応や支援のコーディネート，支援のための企画立案を行うだけでなく，支援者の育成も担っている。以下に，学生特別支援室が実施するノートテイクを含む支援者育成の取り組みを概観する。

3.1 支援スキル研修会の開催

学生特別支援室では，学内の障害学生支援を想定した研修会を開催している。平成29年度は，ノートテイク，指文字や簡単な手話，ガイドヘルプ，車いす操作の確認といった多様なスキルに触れ，身に着ける研修会を5回にわたって開催した。

支援スキル研修会は，特定の支援スキルに特化するのではなく，実用的な複数のスキルを学べる点が特徴であるが，ノートテイクについては，毎回の研修会のメニューに組み込んで，なるべく多くの学生がトレーニングできるよう，またリピーターは練習を重ねられるように工夫した。

3.2 関連授業の開講

平成29年度から共通教育科目に「ユニバーサルデザイン展開科目」が設けられ，「アクセシビリティ支援概論」「アクセシビリティコーディネート演習」「アクセシビリティ支援実習Ⅰ/Ⅱ」が開講された。これらの科目は，学生特別支援室の教職員と教育学部の教員が担当し，多様なニーズやアクセシビリティ支援について学べる内容である。特に「アクセシビリティ支援実習」は，ノートテイクをはじめとした支援スキルを学ぶ実習である。

ユニバーサルデザイン展開科目として開講される科目は，それぞれが独立しているが，すべての科目を履修すれば，障害や支援，多様性理解，ユニバーサルデザインやアクセシビリティについて体系的に学べる仕組みである。さらにこれらの科目は，次に述べる人材育成プログラムと連動しており，アクセシビリティリーダー資格取得のための条件となっている。

3.3 人材育成プログラムの実施

山口大学は，アクセシビリティリーダー育成協議会に参画しており，平成26年度からアクセシビリティリーダー育成プログラムを実施している。2 級アクセシビリティリーダーに加えて，平成29年度からは先述したユニバーサルデザイン展開科目の単位を取得しオンラインでの学習コースを修了すると 1 級リーダー認定試験が受験できるプログラムが整備さている。

学生特別支援室では，多様なニーズやアクセシビリティ支援に関する知識や理解，支援スキルの基礎を身に着けたリーダーが活躍できる機会として，学内の障害学生支援の場を用意するなど，教育プログラムと支援とを連動させて運用する仕組みを計画している。

3.4 学生スタッフの育成

学生特別支援室では，日常的に学生スタッフの育成・指導を行っている。学生特別支援室の学生スタッフは，研修会の運営補佐，支援のための機材の調整・整備，学内バリアフリー調査などを行いつつ，これらの業務を実施するために必要な支援スキルトレーニングを行うことで，業務を通して支援スキルを向上させている。

4 山口大学におけるノートテイカー育成要領

これまで紹介したように，山口大学では支援スキルを学ぶ機会を複数用意している。ここで，支援スキルのうちノートテイクについて，具体的なトレーニング要領を見ていきたい。現在実施しているノートテイカー育成メニューは以下の通りである。

1	ガイダンス
2	筆記文字数／1 分間の計測
3	短文でのテイク練習
4	長文でのテイク練習
5	ペア・グループでのテイク練習
6	連携テイク練習

特に聞こえにくさが強い場合の支援では，パソコン連携テイクを活用するケースが多いと想定されるが，この支援を実施するためにはある程度のスキルが必要となるため，最終的な目標としている。

次に，それぞれのトレーニング工程の内容を概観したい。

4.1 ガイダンス

はじめに，ノートテイクとは何か，支援ニーズとノートテイクの方法についてガイダンスを行う。この際，山口大学での支援ニーズや支援実施状況を合わせて説明しておくと，より支援のイメージが湧きやすい。

多様なニーズにいかに柔軟に対応するかがポイントになることを説明し，ノートテイカーとして実際に支援に携わる可能性を意識することを促す。

4.2 筆記/入力文字数の計測

本格的なトレーニングに入る前に行うのが，１分間で何文字書くことができるか，パソコンの場合は１分間のタイピング速度の計測である。これは，筆記速度を図るだけでなく，どの程度要約が必要かの目安とするためでもある。

話し言葉は１分間に 300 文字程度の情報量と言われるが，対して手書きできる文字数は１分間に 60 文字程度とされる（山本他 2017）。このことから，手書テイクの場合は，5 分の１程度に音声情報を要約して筆記通訳する必要があることが分かる。パソコンでのタイピング速度には個人差があるが，タイピングが早ければ情報量が多くなるため，テイカーは余裕をもって要約筆記に臨むことができる。

4.3 短文でのテイク練習

続いてノートテイク要領を簡単に確認した後，短文でのテイク練習を行ってみる。講師が読み上げた例文を要約筆記した後に，自分がテイクした内容とテイク例とを照らし合わせて，テイク要領を確認していく。150 文字程度の例文を何種類か練習し，テイクの感覚がつかめるようになってから，段階を追って文字数の多い例文に取り組んでいく。

4.4 長文でのテイク練習

短文での練習でテイク要領を確認できたら，長文でのテイク練習に移る。

数分程度の例文でトレーニングすることで，聞きためて要約するスキルを身に着けることが目的である。さらに，話者が複数いる場合や，日時等の重要事項が含まれる内容，質問が投げかけられる例など，複数のパターンの例文を用意してトレーニングしておくと，より現場で柔軟に対応できるスキルを養うことができる。

4.5　ペア・グループでのテイク練習

ここまでのトレーニングは基本的に個人で行うものであるが，次にテイクの質を向上させるために，ペアやグループでの練習を行ってみる。

ペアもしくはグループを組んで，ノートテイカーと聞こえにくい役を決め，テイクした内容が伝わるかの確認を行う。実際に自分のテイクが有効なものなのかを知る機会とするだけでなく，他学生のテイク内容を参考にできるという利点もある。

4.6　連携テイク練習

情報量の多い講義等のテイクを行う場合，テイカーが一人で担当するには負担が大きい。また，テイクの質を担保するためにも複数名での連携テイクが実用的である。そこで，授業での 2 名連携テイクを想定して練習を行う。

手書きの場合は，テイク分量や担当時間，授業内容の区切り等で交代しながら，交互にノートテイクを行う。パソコンでの場合は，まず連携テイク用のソフトの設置・操作要領の確認を行い，次にペアになって，先述した短文や長文を用いて文章を交互にテイクしあうトレーニングに入る。概ね連携テイクのコツがつかめたら，実際の支援を想定して，WEB 公開授業等を活用し，授業音声を聞きながらのテイク練習を行う。はじめは 10 分～15 分程度で長時間の連携テイクの感覚をつかみ，最終的には授業 1 コマ分の連携テイクに挑戦できれば理想的である。

ノートテイクは要約の仕方に個人差が生じるため，特にパソコン連携テイクではペアの相手によって，適宜入力のタイミングを合わせる必要がある。そこで，ペアを変えての練習を積んでおくと，多様な相手との連携テイクがスムーズとなり，実際に支援を実施する際にも，マッチングが容易となる。

図２ ノートテイクの練習風景

4.7　テイクトライアルの実施

ここまでのトレーニングが終了したら，実践に近い形でのトライアルを重ね，機会に応じてデモンストレーションを行うなどして，実際の支援としてのノートテイクに備える。

学生特別支援室では，トライアルの機会として共通教育科目の一部にテイカーを派遣したり，スキル研修会や学生スタッフ活動報告会でのデモンストレーションを行ったりしている。テイクのデモンストレーションでは，テイクした内容をプロジェクタで会場内に投影して出席者に見てもらうため，トレーニング成果のお披露目の場にもなっている。

テイクのトライアルやデモンストレーションは，ニーズの有無に関わらず，支援スキルを磨きつつ，支援者のモチベーションを向上させるための工夫でもある。

5 テイカー育成の成果

前述してきた要領でノートテイカーを育成し，支援の実践に耐えうるスキルを習得した学生スタッフも育ちつつある。また，少ないながらも，支援実施の機会も得た。そこで，テイカー育成の成果を，人的支援実施のための基礎的環境整備，支援スキルの向上，テイカー自身の意識の向上という点から整理しておきたい。

5.1　人的支援のための基礎的環境整備

先述したとおり，大学での障害学生支援のニーズは事前に予測が難しいことも多い。そのため，支援の必要が生じた際，速やかに適当な対応ができる環境をいかに事前に整えておけるかが重要となる。

学生特別支援室では，これまで紹介したように恒常的に支援者を育成する機会を設けている。これらの機会を活用して支援者を確保できていれば，突然の支援ニーズにも，ある程度対応することが可能である。支援者を育成する仕組みを整えることは，人的支援のための基礎的環境整備として重要である。スキルの高い支援者を一定量，安定的に確保できるかが課題である。

5.2　支援スキルの向上

支援スキルを向上させるためには，ある程度トレーニングを重ねていく必要がある。学生特別支援室では学生スタッフが業務を通じて支援スキルを身につけており，ノートテイクに関しては，人数に限りがあるものの実践レベルの能力を身につけた学生も活躍している。

支援スキルの上達状況の例として，パソコンでのタイピング速度の向上を挙げたい。学生特別支援室では，学生スタッフに業務の合間を縫って，タイピングの練習を行うことを勧めている。学生スタッフは，タイピング練習用フリーソフト「Mikatype」で１分間に入力した文字数を計測し，業務報告書に結果を記録していく。

図３は，比較的長期間，学生スタッフとして従事している 4 名のタイピング速度の記録をグラフ化したものである。本格的なトレーニングを開始した平成 28 年度の状況で，各月のベストスコアを示している。

図３を見ると，学生 B は安定して 240 文字/分程度を維持している。学生 A・C・D についてはタイピング速度に上達が見られ，毎月の記録が残る学生 A については，4 月当初 159 文字/分から年度末には 230 文字/分と，着実にスキルアップしている様子が見て取れる。また，学生 C の伸び率は高く，7 月にトレーニングを開始した時点では 139 文字/分であるが，翌年 3 月には 259 文

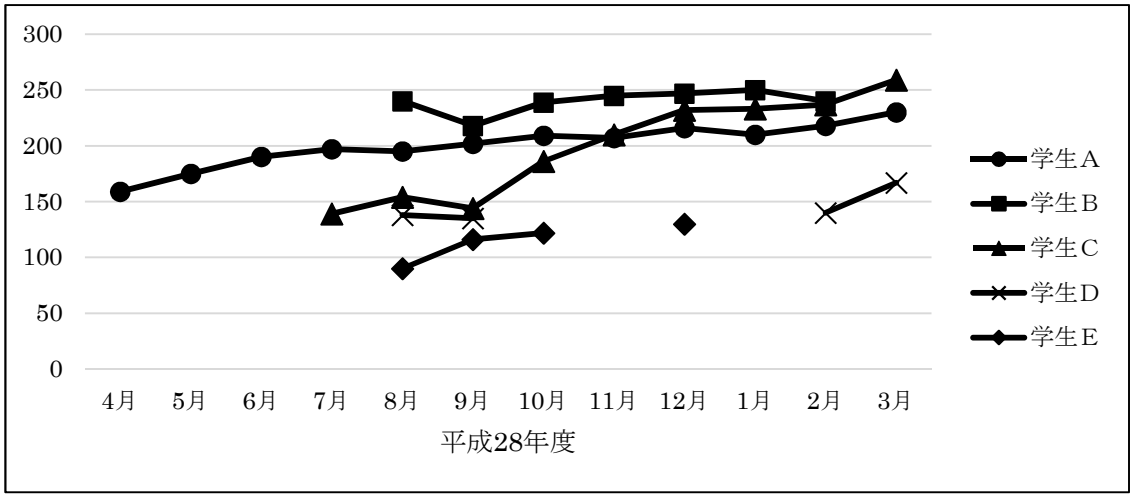

図３ タイピング速度上達状況（文字数/分）

字/分と，120 文字/分の上達が見られた。

図３で紹介した以外の学生スタッフについてもタイピング速度の向上が見られ，ノートテイカーとして今後の活躍に期待がかかる。

5.3　支援者としての意識の向上

学生スタッフたちは，学生特別支援室での活動に従事するなかで，支援スキルと併せて業務や支援に対する意識を向上させている。その様子が垣間見える機会の一つが「学生特別支援室 学生スタッフ活動報告会」である。この報告会は，学生特別支援室が平成 27 年度から年に一度開催しているもので，これまで各学部の障害学生支援担当の教職員や施設環境部の職員，学生対応窓口業務を担う関連部署の教職員等に参加いただいてきた。

報告会では，学生特別支援室の学生スタッフ自らが，バリアフリー調査結果報告，アクセシビリティリーダーキャンプへの参加報告，ノートテイクのデモンストレーション等，その年取り組んでいる活動についてプレゼンテーションを行う。

本年度の報告会では，身障者用トイレの現状調査，駐輪場の利用状況，学内移動ルートに関する調査結果に加えて，ノートテイク実施に関する報告が行われた。以下は，報告会で紹介されたノートテイカーたちのコメントである。

- 手書きよりもパソコンでのテイクの方が情報量は多くなるが，手書きの場合は書き方次第で話の流れ・つながりがよりわかりやすくなるため，両方にそれぞれの良さがあると感じた。
- テイクする場面，場所，方法などは様々なので，状況に臨機応変に対応できなければいけない。そのためには実際のテイクの経験がとても大事である。
- 話し手や話の内容等は勿論，連携テイクの場合相手との連携がうまくとれるか否かが情報の量・精密さを左右することを痛感した。
- 専門外の講義や講座等でのテイクでは，事前に資料をもらえたり，内容が少しでも把握できているとテイクがしやすくなると感じた。

これらのコメントからは，学生たちが状況に合わせたテイク実施における課題をよく理解し，より良い支援を実施するために何ができるのかを自ら考えている様子がうかがえる。そこに見えるのは自主性や責任感，課題克服にむけて建設的に考える姿勢である。支援者育成の過程において育まれるのは，支援スキルだけでなく，学生たちの自主性や積極性，課題解決能力でもある。

６ 支援者育成の課題と今後の展望

本稿では，山口大学でのノートテイカー育成要領とその効果を紹介してきた。最後に，ノートテイカーの育成から見た支援者育成上の課題を整理しておきたい。

人的支援に必要なのは，支援スキルを持った支援者の確保である。学生特別支援室では，これまで説明してきた要領でテイカーを育成しているが，育成した支援者数には限りがあり，複数の科目で同時に授業中支援を展開するには難しい状況である。

今後，学生特別支援室の取り組みやユニバーサルデザイン展開科目，アクセシビリティリーダー育成プログラム等についていっそうアピールしつつ，支援者候補の学生をプールしておく必要がある。学生特別支援室では学生向けのメーリングリストを用

意しており，現在 60 名程度の登録者数を得ている。メーリングリストに登録している学生たちを支援者候補として，うまくトレーニングメニューに乗せて支援スキルの向上を狙う工夫が必要となる。

支援者の育成には時間と手間をかけたいところであるが，状況によっては支援実施までに時間的余裕がなく，限られた期間内で支援者を確保・育成しなければならない。この場合，短期間で効果を出せるような，効率的な支援者育成が必要となる。そのためには，単に支援を実施する人員を集めておくのではなく，支援と教育とを連動させて，日ごろから支援スキルに触れる機会を作ったり，アクセシビリティ支援への意識の高い学生を増やしておくことが重要となる。そのために効果的なのが、ユニバーサルデザイン展開科目の開講や支援スキル研修会等の開催である。これらを通して基礎的な支援に関する知識や技能を習得しておけば，支援実施の直前に必要なスキルを学びなおすことで，支援準備が効率化するはずである。

育成した支援者を支援の場に配置する段階では，運用上の課題を克服しておく必要がある。ノートテイクについて言えば，機材やネットワーク環境等，テイクを実施しやすい環境を整えておく必要があるし，テイカーのマッチングや，体調不良等による急な欠席等のリスクも念頭に置いておかなければならない。これらを想定し，事前に運用体制を確認しておくことが重要となる。

支援ニーズが定まらない中で人的支援に備えるためには，いかに負担が少なく効果的な準備を行えるかがポイントとなる。山口大学は広島大学に事務局を置く UE-NET（教育のユニバーサルデザイン化推進ネットワーク）に加入しており，取り組みの一環として，平成 28・29 年度と遠隔でのノートテイクトライアルを実施してきた。また本年度からは，ユニバーサルデザイン展開科目「アクセシビリティ支援実習Ⅰ/Ⅱ」での活用のため，テキスト「アクセシビリティ支援活動の手引き」（山本他 2017）を共有している。大学間の連携事業等をうまく活用しつつ，本学の授業や人材育成プログラムとも連動させて，より効率的で充実した支援者の育成を行っていきたい。そのことにより多様なニーズやアクセシビリティ支援に関する意識や理解，スキルを持った学生が育ち，本学のユニバーサルキャンパスの実現の一助となるなら幸いである。

（学生特別支援室　講師）
（大学教育センター教授
・学生特別支援室室長）
（学生特別支援室　カウンセラー）
（学生支援課　事務職員）

【参考文献】

障害を理由とする差別の解消の促進に関する法律

日本学生支援機構，2017,「平成 28 年度（2016 年度） 大学，短期大学及び高等専門学校における 障害のある学生の修学支援に関する実態調査 調査の手引」

山本幹雄，岡田菜穂子，山崎恵里，坂本晶子,2017,広島大学アクセシビリティセンター「アクセシビリティ支援活動の手引き～支援に関する基礎知識と基本技能～」

山口大学学生特別支援室ホームページ，http://ssr.ssc.oue.yamaguchi-u.ac.jp/